

利便性の向上と新たな交流の創出

——保戸島でのグリスロ実証

本誌編集部

高齢者と観光客の島内移動の一助に

大分県津久見市保戸島は、津久見港から東北東へ約一四キロメートルの豊後水道に位置する。面積〇・八六平方キロメートル、遠見山（二七九メートル）を頂点に急傾斜地が海岸に迫り平地が少なく、民家は西から南側に密集して建っている。

基幹産業は漁業で、一時はマグロはえ縄漁業の基地として栄え、三〇〇〇人を超える人口を誇ったが、近年は水産業の低迷や少子高齢化などにより、五三七人、高齢化率七七・七パーセント（令和六年七月）となっている。

島内に公共交通機関はなく、住民は自転車、軽自動車や原付バイク、観光客は徒歩が主な移動手段となっている。車などに乗れない住民（特に高齢者）、観

光客などの移動が課題で、船乗り場や島内唯一の診療所のある中心部に一時間近く歩いて通う高齢者もいる。また、荷物を本土から持って帰る時は、「てば」という背負い籠で運ぶ住民も多い。

これらの課題解決に向けて津久見市では、グリーンスローモビリティ（グリスロ※）の導入を検討。今年度、交通エコロジー・モビリティ財団（エコモ財団）の「離島におけるグリスロの活用に向けた試走・実証調査」の採択を受け、七月一二日から八月九日までの期間、七人乗りのグリスロ一車輛を導入（無償貸与）し、港と住宅のある地域を結ぶ試走・実証を行なった。

定時／予約を組み合わせた実証運行申請計画では、まず保戸島の住民に

グリスロを周知し島内移動の負担や不安を軽減すること、徒歩での移動に躊躇し家に閉じこもりがちな高齢者の外出のきっかけづくりなどを、実証の主目的に挙げている。加えて、島の中心部の徒歩での散策がメインだった観光に幅を持たせることで、来島者の増加につなげる狙いもある。

実証期間中のグリスロの運転は保戸島区長会（高瀬清彦会長）が担った。船乗り場を起終点に南側の学校と北側のながばえ地区を、船の発着に合わせて定時運行。これに加えて、住民の通院や買い物利用に合わせた運行、観光客の要望により観光スポット（間元海峡^{まもと}や瀬の浜海岸付近）をめぐる運行を、定時運行の合間に予約制で設けた。

当初の運行時間は、定期船の第一便



港に着いた住民や観光客を乗せて走行するグリスロ。

から四便までの六時四五分～一五時一〇分としていたが、最終便（第五便）に合わせた利用希望者も多く、実際には一七時半ごろまでの運行となった。

グリスロの運転を担った高瀬会長によると「多くの住民がグリスロを利用している。低床なのでお年寄りでも乗り降りしやすい。診療所が開かれる日は利用者が増える。学校側からながばえ地区へ行く方もおり、新たな交流も

生まれている」という。観光客の評価も上々で「島内観光がしやすくなったので、実証期間中に二回来た」というリピート客もみられた。

本格導入を望む声

グリスロの利用者アンケートの調査結果によると、住民の約六五パーセントから回答があり、そのほとんどが本格導入を望むものであった。「診療所へ行くのに助かっている」「荷物を載せることができて便利」など多くの好意的な声が寄せられた。

保戸島出身で津久見市議会の島田勝副議長は「今回の実証で、グリスロの必要性を実感した住民は多い。高齢化の進展とともに利用希望者が増えていくことも踏まえ、本格導入を前向きに検討していきたい。ただ、車輛の購入費はもちろん、運転者の確保やメンテナンス、運賃などの運営面について考える必要がある」と語った。

グリスロに関心のある島の皆さまへ

日本離島センターでは離島でのグリスロの活用の促進を目的に、今回の保戸島および昨年度の実証地・愛知県佐久島（詳細は本誌二七五号参照）での実証の模様を映像にまとめた。本財団ウェブサイト（※2）にて視聴可能（二〇月公開予定）なので、グリスロに関心のある皆様はぜひご覧いただきたい。

また、エコモ財団では、「離島グリスロ試走・実証調査」に限らず、グリスロに関心のある離島関係市町村からの相談を受け付けているので、お問い合わせいただきたい。（森田）

※1…時速二〇キロメートル未満で公道を走行できる電動車を活用した小さな移動サービスおよびその車両も含めた総称。



※2

グリスロの導入・活用に関する
ご相談・お問い合わせ

公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団
電話：03-5844-6268（交通環境対策部）